

ヒューズからゴフマンへの継承と展開

—シカゴ学派と相互作用論の再評価をめぐって（2）—

野田 浩 資

1. はじめに

本稿は、シカゴ学派社会学および相互作用論の再評価を課題とするものであり、「初期シカゴ学派」から第二次大戦後の「第二次シカゴ学派」へという知的系譜において、エヴェレット・C・ヒューズ（Everett C. Hughes）と彼の学生であったアーヴィング・ゴフマン（Erving Goffman）との関係について検証を試みるものである（野田，2019）。シカゴ学派創立者であるパークに学んだヒューズと、「第二次シカゴ学派」の中心人物であるゴフマンの関係を、理論的に再評価しようという試みである。ヒューズとゴフマンの関係性を問うことは、シカゴ学派社会学および相互作用論の再評価を背景とするヒューズ自身の再評価と重なり、「シカゴ学派社会学」の継承と展開において重要な側面となる。前稿で課題として示したように、先行するパークからの影響、ヒューズによる展開、そして、学生たちの世代による継承、展開を検証していくことが求められており、本稿はその試みの一部である（野田，2019）。

以下、2節では、「ヒューズ-ゴフマン関係」において、両者の伝記的な経歴上の関係について概観する。3節では、両者の理論的關係について、概念装置と準拠枠から検証を試みる。4節では、2節、3節の検討をもとに「ヒューズ-ゴフマン関係」について考察し、シカゴ学派社会学と相互作用論の再評価を進めたい。

2. ヒューズとゴフマンの伝記的關係

2.1. 教育と研究

シカゴ学派と相互作用論の再評価と連動して、ヒューズの再評価が進行する中で、さらに、ヒューズとの関連の中で浮かび上がってくるのがゴフマンの存在である^{*1}。

*1 ゴフマンの理論家としての再評価は、ギデンズの構造化論によって評価されることによって進んできた（Giddens, 1987=1997; 宮本, 2020）。近年もゴフマンを再評価する動きは進んでいる（中河・渡辺編, 2015）。

ヒューズは、1897年にオハイオ州で生まれ、シカゴ大学大学院でパークの下で学び、シカゴ学派社会学の創設者パークの下で学び、カナダのマクギル大学に赴任、その後、1938年にシカゴ大学に戻り、第二次大戦後、「第二次シカゴ学派」の中心となるゴフマンらの学生を指導するとともに、社会学科長と『アメリカ社会学雑誌』（American Journal of Sociology）の編集を務めた。シカゴ大学の後は、1961年からブランダイス大学、1968年からボストン大学で学生を指導し、1963年にはアメリカ社会学会会長を務め、1983年に86才の生涯を終えた。

ゴフマンは、1922年にカナダで生まれ、トロント大学を卒業後、1945年にシカゴ大学大学院に進学し、ヒューズとウォーナー（William Lloyd Warner）の指導の下、1949年に修士号取得、ヨーロッパへの留学（イギリス、シェットランド諸島、および、パリ）を経て、1953年にシカゴ大学大学院で博士号を取得している。その後、ワシントンD.C.郊外の聖エリザベス病院でフィールドワークを実施し、その調査結果がまとめられたのが1961年出版の『アサイラム』である。その後も『フレームアナリシス』などの数多くの著作で知られ、1958年からカリフォルニア大学、1968年からペンシルヴァニア大学で教え、1982年アメリカ社会学会会長に選出されるが、同年11月20日癌のため死去している。

ヒューズは、シカゴ大学において「シカゴ社会学の伝統」を後続の世代に伝え、それを継承した代表的な学生がゴフマンであったといえよう。しかしながら、ゴフマンをめぐる理論的研究においては、シカゴ学派およびヒューズからゴフマンへの影響については、十分な評価が進んでいない状況にある。

2.2. ヒューズとゴフマンの師弟関係

ゴフマンに対しては、理論的位置づけが多様になされてきた。シンボリック相互作用論に位置づけるものが主要なものであり、デュルケミアン、ジンメリアンとして、また、エスノメソドロジーとの関係などを含めて多様な立場から論じられてきたが、近年までシカゴ学派およびヒューズとの関係については、注目を向けられることが少なかった（Helle, 1998）。

ゴフマンへのインタビューとしては、フェルホーヴェンとヴァンカンのものが知られている（Verhoeven, 1983；Winkin, 1988 = 1989）。インタビューの聞き手は、ゴフマンをシンボリック相互作用論者として位置づけ、ゴフマンが、そのレッテルを拒否し、「ヒューズ派都市エスノグラファー」（Hughesian Urban Ethnographer）、「ヒューズ派社会学者」（Hughesian Sociologist）と応じている。

ヴァンカンによるインタビューでは、ゴフマンは次のように語っている²。

ヒューズ、ウォーナー、ブルーマーの育てた研究者たちは、自分たちを職業社会学者、あるいは産業社会学者と考えている。あなた方のような人たちから象徴的相互行為主義者

² インタビューは、1980年4月23日フィラデルフィアで、テープレコーダーなしで行われたものであり、面談中のノートに基づく無加筆の記録とされている（Winkin, 1988 = 1989：137）。

とよばれているにすぎない (Winkin, 1988 = 1989 : 144)。

私はヒューズに育てられました。『日常生活における自己呈示』はヒューズ風の構造的社会心理学です。シカゴの友人たちと私は一種の集団的連帯を形成しています。たとえば私はデーヴィスととても近しかった。その人々が〈象徴的相互行為主義者〉とよばれました。思うにそれで〈象徴的相互行為主義〉に属するとされたのでしょうか。しかし、忘れないで下さい。それはレットテルにすぎません (Winkin, 1988 = 1989 : 146)。

ゴフマンは、シンボリック相互作用論というレットテルを拒否し、ヒューズの学生たちによって形成されていた「ヒューズ派社会学者」の一員であることを表明している。一方で、著者のヴァンカンは、著作の本文では、次のように述べて、ヒューズとゴフマンの間の関係の難しさを指摘している。

(それは珍しいことだが) ゴフマンが求めている数少ない知的系譜の社会学の一つである。ゴフマンがヒューズを防壁として利用したことも確かである。それはともかく、客観的には両者の著作には類似点が存在する (Winkin, 1988 = 1989 : 48)。

ゴフマンはヒューズの学生ではあったが、ゴフマン後期の著作の中で、シカゴ学派およびヒューズへの言及、参照が少ないことから、両者の関係を評価することが難しくなっている。しかしながら、近年の研究では、両者の間には、深い交流と影響関係があったことが示されてきている。

ジャウォルスキは、「ゴフマン研究において、ゴフマンとヒューズの関係は、(十分には) 正当に評価されていない」(Jaworski, 2000 : 300) としたうえで、ゴフマンが、自らの社会学的な独自性、創造性を担保するために、ヒューズとの間に距離をとることになった「反抗的な弟子」(reluctant apprentice) として理解する可能性を示している。ゴフマンにとってヒューズは、「父親代わり」(father figure) の信頼すべき指導者である一方、「過激な革新者」としての自身の才能ゆえに一定の距離を置くことになったとする (Jaworski, 2000 : 305)。

ヴィエンヌは、ヒューズからゴフマンへの影響の大きさを指摘したうえで、「ヒューズは、渡し守 (ferryman)、彼の学生と古典的なアメリカおよび国際的な社会学の『橋』として振る舞った」と評価している (Vienne, 2010 : 25)。学生たちは一種の「浸透」(osmosis) によってヒューズのパースペクティブを学び、ヒューズは、学生たちが自分自身の社会学をつくり出していくのを見守る「弟子を独立させる親方」(discrete master) であったと推測している。

3. ヒューズとゴフマンの理論的關係

3.1. 『アサイラム』の構成と概念装置

ヒューズとゴフマンの関係について、理論的なレベルで検証を試みたい。ここでは、ヒューズ

からの影響が色濃く確認できると思われる『アサイラム』（Goffman, 1961 = 1984）を中心としてとりあげる。『アサイラム』は、『日常生活における自己呈示』（Goffman, 1959 = 1974）とともに、前期ゴフマンを代表する著作であり、これら2著からドラマトウルギー論が展開され、『フレームアナリシス』など後期の研究の源となっていると評価される。

『アサイラム』は、よく知られている著作であるが、その構成を、概念装置のレベルで検討することから始めよう。『アサイラム』は、序と4つの章からなる論文集である。4つの章の関係は、ゴフマン自身も序言で述べているように体系だったものではない。原著では、章に番号はついていないが、便宜的に章番号をつけて紹介する³。

序

第1章 全制的制度の特徴について

第2章 精神病患者の道徳的キャリア

第3章 公的制度体における日陰生活——精神病院でうまくやっていく方法の研究

第4章 医療モデルと精神病による入院——修理業の変遷についてのノート

『アサイラム』の理論的枠組の主要な構成要素は、「キャリア」と「制度／制度体」である。シカゴ学派と相互作用論の共有財産ともいえる2つの概念装置が、著作全体に理論的構造を与えている（野田，1991）。

第1に、第2章に典型的に示されているように、「キャリア」概念が、理論的枠組となっている。「キャリア」概念は、パーク以来のシカゴ学派の共有財産であり、ヒューズの職業社会学の影響は明瞭である。

伝統的にキャリア（career）という語は、世間的評価の高い職業（専門職）によって予定された昇進にあずかるはずの人びと専用のものでされてきた。しかしながら、この語は、意味が拡張されて、人が一生の間に辿る社会的経路を言い表すのに用いられ始めている。自然史というパースペクティブが採られ、特定の社会的カテゴリーの構成員に基本的で共通な長年にわたる様々な変化——もっともこれらの変化は個々の構成員によって独立に経験されるのではあるが——が重視され、個々人に特異な結果は無視される。この意味でキャリアは、輝かしいとか惨めというようなものではなく、また成功とか失敗とかいうようなものでもない。このような視角で私は精神病患者を考察してみたいと思う（Goffman, 1961 : 127 = 1984 : 133）。

*3 以下、訳書を参考とした上で、原著を参照し、文脈に応じて訳語の変更などを行っている。例えば、「institution」は、訳書では「施設」とされているが、本稿では、「制度」「制度体」としている。「career」は、訳書では、「履歴」とされているが、本稿では、「キャリア」としている。野田（1990）、野田（1991）を参照。

職業研究で用いられてきた概念装置である「キャリア」を、精神病患者に適用していくことが示されている。それまでの職業研究であれば、専門職であるスタッフの側に用いる概念装置を、クライアントである患者の「道徳的キャリア」に光を当てていく、ここには、概念装置の水準での共通性ととともに、概念装置の転用、もしくは、パースペクティブの転換がみられ、その点が、ゴフマンの独自の展開につながっているといえよう。

第2に、第1章、第3章において典型的に示されているように、「制度／制度体」としての精神病院（などの全制的制度）を扱っていることが明瞭である。

〈手段的形式的組織〉(an instrumental formal organization)とは、いくつかの包括的な明示的目的を達成するように計画され合目的に整序された活動のシステムと定義されよう。意図される産出物は、物的製品、サービス、決定、情報であり、それらは多様な仕方に参加者に分配される。私が主として関心をもつのは、単一建築物ないしは隣接する建築物の複合体の境界内に場をもつたぐいの形式的組織である。こられの壁に囲まれた単位を、便宜上、社会的営造物、制度、あるいは組織(a social establishment, institution, organization)と私は呼ぶことにする(Goffman, 1961: 175-176 = 186-187)。

『アサイラム』の主たる対象は、さまざまに言い換えられているが、「制度／制度体」(an institution / institutions)である。収容型の精神病院という制度体の内部における、その構成員たち(スタッフと入院患者)の相互作用と意味世界を丹念に描き出したのが『アサイラム』なのである。職業社会学・専門職論であれば、医師やスタッフの側から描かれる対象を、主に精神病院の患者たちの側から描くことには、「キャリア」概念装置の転用、パースペクティブの転換を指摘できる。

3.2. 解釈的制度生態学の準拠枠から

次に、前稿で紹介した「解釈的制度生態学」(interpretive institutional ecology)の準拠枠から検討を行おう。ヒューズ再評価を進めているヘルメス＝ヘイズが、ヒューズが発展させた準拠枠として提示しているのが「解釈的制度生態学」である(Helmes-Hayes, 1998; 2010; Helmes-Hayes & Santoro, 2016)。ヘルメス＝ヘイズは、「解釈的制度生態学」の特徴を以下のようにまとめている(野田, 2019: 102-103)。

- (1) 人間生態学を基盤とすること
- (2) 「制度／制度体」を分析の単位としていること
- (3) ミクロとマクロの両方の要素の構造と過程を対象としていること
- (4) 調査対象へのアプローチが、マルチメソッドであること。

以上の4点は、相互に密接な関係をもち、それぞれを分離して論じることが困難ではあるが、以下では、ヒューズの『制度体の成長——シカゴ不動産協会』（The Growth of an Institution: The Chicago Real Estate Board）（以後、『シカゴ不動産協会』）とゴフマンの『アサイラム』の対比を中心として、検討を進める。

第1に、『シカゴ不動産協会』においては、リアルターという称号をもつ新興の専門職団体としての「制度体」が、職業としての地位向上を図る中で、他の同業者たちとどのように競争し、環境に適応していくかというストーリーが明確であった。「制度／制度体」が、より包括的な外部環境である（コミュニティ）に対して適応していくという生態学的な説明がおこなわれている。一方、『アサイラム』においては、精神病院という「制度／制度体」については、その包括的な外部環境への適応の視点は明確ではない。むしろ、『アサイラム』においては、第3章に見られるように、精神病患者たちが病院の「日陰生活」においてどのように適応し、社会的関係や儀礼を発達させているかが描かれている。

第2に、研究の対象が、「制度／制度体」であることは、両者の共通点である。『シカゴ不動産協会』においては、シカゴの不動産業者の業界団体という「制度体」が中心的な分析単位である。一方、『アサイラム』において主たる対象が「全制的制度」（トータル・インスティテューション）であり、一つの精神科の収容型の病院であった。ただし、『シカゴ不動産協会』においては、「不動産協会」と外部環境との間の相互作用に比重が置かれている一方、『アサイラム』においては、スタッフと患者の間、患者間の相互作用に比重が置かれていることは、両者の相違点である。

第3に、『シカゴ不動産協会』では、「制度／制度体」を「構造」と「概念」を構成要素としていると定義することが、「ミクロとマクロの両方の要素の構造と過程」を対象とすることにつながっていた。『不動産協会』において、「構造」は、「特定の局面において共同するように配置された職務分担者」（functionaries）であり、具体的には、「リアルター」という専門職としての地位向上を目指す「理事会」（board）のメンバーである。「概念」に相当する部分として描かれているのが、資格認証のための規約（code）であり、政策（policy）であり、コミュニティに対して「役割」を引き受けることであった。『アサイラム』において、同様の過程に相当するのは、スタッフたちと患者たちが、外部社会に対して、意味世界を形成し、維持している姿である。多くの全制的制度は、何らかの理想的基準の方向へと被収容者を変えることを公式的目的として掲げつつ、被収容者の保管場所として機能していることをゴフマンは描き出した。「制度／制度体」の「明示的」な目標や目的が貫徹されず、逆に、「制度／制度体」の内部に「非明示的な仮定」（assumption）に基づく意味世界（第二次的調整、さまざまな儀礼）を発展させていく姿であった。

両者には、描かれた意味世界の形成の方向性の違いを指摘できるが、両者ともに、ミクロとマクロ、構造と過程を対象とすることにつながっている。両者に共通するのは、「制度／制度体」のフォーマルに設立された実体（法人、企業など）である「構造」面と、「概念」解釈面と、「制度／制度体」が、人々に対し影響を与え、また、人々が「制度／制度体」を作り出すという社会現象の水準間の視点の移動であり、「ミクロからマクロの両方の要素の構造と過程」の重層性で

ある。

第4に、調査方法においては、ヒューズは、質的調査法に限定されず、統計を活用するなど、折衷主義的ともいえるマルチメソッドを採用し、学生たちにも要求していた。一方、『アサイラム』は、細密な記述、質的調査法を貫くことによって完成した作品であり、マルチメソッドという基準からははずれることによって、ゴフマン独自の社会学が作り出されていくことになったとも解釈できよう。

4. 考察

以上のように、「ヒューズーゴフマン関係」は複雑であり、事実関係を踏まえながら、慎重に検証を進める必要がある。2節、3節をもとに、考察を進め、今後の課題の指摘と検討を試みたい。

第1に、ヒューズからゴフマンへの継承の部分として、両者の共通性を確認してきた。「キャリア」と「制度／制度体」という概念装置において、解釈的制度生態学という準拠枠において、両者に多くの共通性を確認することができた。

1940年代から50年代、ヒューズは、学生たちとの「職業」「制度」をテーマとするゼミを継続していた。ゴフマンもその一員であった。ここに一種の「集団的連帯」が形成されていた。ヒューズは、職業社会学・専門職論について、1952年に特集号「仕事の社会学的研究」を編集し、1958年に論文集『人と仕事』をまとめている。この論文集には、1920年代から1950年代の論文がまとめられているが、職業研究の論文は、1950年から1955年頃を中心としている。そこには、仕事のドラマ論、儀礼論、専門職権力論など、ゴフマンの『アサイラム』と共通するテーマが盛り込まれている（野田、2006）。ヒューズの職業研究・専門職論は、1940年代のゼミから始まり、共同研究など学生たちとの関わりから生まれてきたものであった。後に『白衣の少年たち』（Boys in White, 1961）にまとめられるベッカー、ギア、ストラウスとの共同によるカンザス医科大学の調査も進行中（1956～57年頃）であった。ゴフマンは、1949年に修士号取得後、ヨーロッパに渡り、1952年にシカゴに戻り、1953年に博士学位を取得した。その後、1954年頃に『アサイラム』のもととなった調査に取り組み、『アサイラム』が出版されたのが1961年である。この1940年代から50年代に相互の影響が「滲透」し合っていたとも捉えられるのではなかろうか。ゴフマンを含めた他の学生との関係性の中での継承と展開のあり方の検討が求められる。

第2に、ゴフマンによる展開がどのようになされたかを検討する必要がある。3節で示したように、ヒューズとゴフマンの間に、概念装置の水準でも、また、解釈的制度生態学という準拠枠の水準でも共通性を確認できる一方、概念装置や準拠枠の転用、パースペクティブの転換によって、ゴフマン独自の社会学の展開へとつながっていることを確認することができた。

パークから継承したシカゴ学派の共有財産を、ヒューズ自身がどのように継承し、展開させたか、ヒューズの到達点をゴフマンらの学生たちがどのように継承し、展開し、独自の社会学を生み出してきたのか、それぞれを検証していく必要があるであろう。

【Everett C. Hughesの主要著作】

- 1931 The Growth of an Institution: The Chicago Real Estate Board, The University of Chicago Press (=1979, Arno Press) .
- 1943 French Canada in Transition, The University of Chicago Press.
- 1952 Where Peoples Meet: Racial and Ethnic Frontiers (with Helen MacGill Hughes) , The Free Press.
- 1958 Men and Their Work, The Free Press.
- 1961 Boys in White: Student Culture in Medical School (with Howard S. Becker, Blanche Geer, Anselm Strauss) , The University of Chicago Press.
- 1968 Institutions and the Person (edited by Howard S. Becker, Blanche Geer, David Riesman, Robert Weiss) , Aldine.
- 1971 The Sociological Eye, Transaction Books.
- 1994 Everett Hughes on Work, Race and the Sociological Imagination (edited by Lewis A. Coser) , The University of Chicago Press.

【参考文献】

- Chapoulie, Jean-Michel, 1996, "Everett Hughes and the Chicago School Tradition", Sociological Theory 14 (1) : 3-29 (=Helmès-Hayes & Santoro, 2016 : 39-69.) .
- Chapoulie, Jean-Michel, 2020, Chicago Sociology, Columbia University Press.
- Giddens, Anthony, 1987, Social Theory and Modern Sociology, Polity. (=1998, 藤田弘夫監訳『社会理論と現代社会学』青木書店.)
- Goffman, Erving, 1959, The Presentation of Self in Everyday Life, Doubleday. (=1974, 石黒毅訳『行為と演技』誠信書房.)
- Goffman, Erving, 1961, Asylums : An Essays on the Social Situation Mental Patients and Other Inmates, Doubleday. (=1984, 石黒毅訳『アサイラム——施設被収容者の日常生活』誠信書房.)
- Goffman, Erving, 1974, Frame Analysis : An Essay on the Organization of Experience, Harper & Row.
- Hell, Horst J., 1998, Erving Goffman : a symbolic interactionist ?, Tomasi ed. : 179-190.
- Helmès-Hayes, Rick, 1998, "The Sociology of 'Going Concerns' : Everett Hughes' Interpretive Institutional Ecology", Tomasi ed. : 217-249.
- Helmès-Hayes, Rick, 2010, "Studying "Going Concerns" : Everett C. Hughes on Method", Sociologica 2 : 1-27. (=Helmès-Hayes & Santoro eds., 2016 : 71-91.)
- Helmès-Hayes, Rick & Marco Santoro eds. , 2016, The Anthem Companion to Everett

- Hughes, Anthem Press.
- Jaworski, Gary D., 2000, "Erving Goffman: The Reluctant Apprentice", *Symbolic Interaction* 23 (3) : 299-308.
- 宮本孝二, 2020, 『ギデンズと社会理論家たち』 八千代出版.
- 中川伸俊・渡辺克典編, 2015, 『触発するゴフマン——やりとりの秩序の社会学』 新曜社.
- 野田浩資, 1990, 「ヒューズ職業社会学におけるマクロ・シンボリック相互作用論」『ソシオロジ』 35 (1) : 53-69.
- 野田浩資, 1991, 「相互作用論の重層性——キャリア・自然史・レトリック」『ソシオロジ』 36 (2) : 21-36.
- 野田浩資, 1997, 「〈プロフェッションの社会学〉の原型：E・C・ヒューズ『制度体の成長——シカゴ不動産協会』」寶月誠・中野正大編『シカゴ社会学の研究』 恒星社厚生閣 : 383-406.
- 野田浩資, 2003, 「ヒューズによる『シカゴ学派の伝統』の継承と伝達」中野正大・寶月誠編『シカゴ学派の社会学』 世界思想社 : 268-278.
- 野田浩資, 2006, 「ヒューズ専門職論の成立：Men and Their Work (1958) の再検討」シカゴ社会学研究会・中野正大編『現代社会におけるシカゴ学派社会学の応用可能性』（科学研究費補助金研究成果報告書） : 99-106.
- 野田浩資, 2019, 「ヒューズ社会学における解釈的制度生態学の射程——シカゴ学派と相互作用論の再評価をめぐる」『京都府立大学学術報告（公共政策）』 11 : 99-109.
- Tomasi, Luigi ed., 1998, *The Tradition of the Chicago School of Sociology*, Ashgate Publishing.
- Verhoeven, Joseph, 1993, "An Interview with Erving Goffman", *Research on Language and Social Interaction* 26 (3) : 317-48.
- Vienne, Philippe, 2010, "The Enigma of the Total Institution : Rethinking the Hughes-Goffman Intellectual Relationship", *Sociologica* 2010 (2) : 1-30.
- Winkin, Yves, 1988, *Erving Goffman : Les Moments et Leurs Hommes*, Seuil/Minuit. (= 1989, イーヴ・ヴァンカン (石黒毅訳) 『アーヴィング・ゴッフマン』 せりか書房.)

(2020年9月30日受理)

(のだ ひろし 京都府立大学公共政策学部教授)

